

[ジベレリン水溶剤]

農林水産省登録 第21318号

性 状：白色発泡性錠剤

毒 性：普通物

危 険 物：—

有効年限：4 年

包 装：8錠×10×10

S T ジ ベ ラ 錠

有効成分：ジベレリン……3.58% [1錠(700 mg)中にジベレリン 25 mg]



「住友化学農業ガイド」の見方：i-農力サイトの「製品情報」、「農業ガイドを見る」から、「農業ガイドの見方」をご覧ください。
本剤の最新情報：こちらのQRコードを読み取るとi-農力サイトに掲載されている本剤の最新情報がご覧になれます。

[適用と使用方法]

●ぶどう

作物名	使用目的	使用濃度	10アール当り 使用液量	使用時期	総使用回数	使用方法
ぶ ど う (ヒムロッドシードレスを除く2倍体米国系品種) [無核栽培]	無種子化 果粒肥大促進	第1回目 ジベレリン 100 ppm 第2回目 ジベレリン 75～100 ppm	果房散布の 場合は 30～100 ℓ	満開予定日約14日前 (第1回目) 及び満開約10日後 (第2回目)	2回、 但し#2	第1回目：花房浸漬 第2回目：果房浸漬 又は果房散布
ぶ ど う (ヒムロッドシードレス)	果粒肥大促進	ジベレリン 100 ppm	—	着粒後	1回、 但し#1	果房浸漬
ぶ ど う (デラウェア) [無核栽培]	無種子化 果粒肥大促進	第1回目 ジベレリン 100 ppm 第2回目 ジベレリン 75～100 ppm	果房散布の 場合は 30～100 ℓ	満開予定日18～14日前 (第1回目) 及び満開約10日後 (第2回目) 満開予定日約14日前 (第1回目) 及び満開約10日後 (第2回目)	2回、 但し#2	第1回目：花房浸漬 (ホルクロルフェニクロン 1～5 ppm液に加用) 第2回目：果房浸漬 又は果房散布 第1回目：花房浸漬 第2回目：果房浸漬 又は果房散布
ぶ ど う (キャンベルアーリーを除く2倍体米国系品種) [有核栽培]	果粒肥大促進	ジベレリン 50 ppm	—	満開10～15日後	1回、 但し#1	果房浸漬
ぶ ど う (キャンベルアーリー) [有核栽培]	果房伸長促進	ジベレリン 3～5 ppm	30～100 ℓ	満開予定日 約20～30日前 (展葉3～5枚時)	本 剤： 1回 但し#1 ジベレリン： 2回以内 但し#4	花房散布
	無種子化 果粒肥大促進	第1回目 ジベレリン 25 ppm 第2回目 ジベレリン 25 ppm	—	満開時～満開3日後 (第1回目) 及び満開10～15日後 (第2回目)	本 剤： 2回 但し#2 ジベレリン： 3回以内 但し#5	第1回目：花房浸漬 第2回目：果房浸漬

作物名	使用目的	使用濃度	10アール当り 使用液量	使用時期	総使用回数	使用方法
ぶどう (2倍体欧州系品種) [無核栽培]	無種子化 果粒肥大促進	ジベレリン 25 ppm	—	満開3～5日後 (落花期)	本剤： 1回 但し#1 ジベレリン： 3回以内 但し#5	花房浸漬 (ホルクロールフェニユ ロン10 ppm液に加用)
	果房伸長促進	ジベレリン 3～5 ppm	30～100 ℓ	展葉3～5枚時	本剤： 1回 ジベレリン： 3回以内 但し#5	花房散布
ぶどう (巨峰、ルビーロマン、 ハニービーナス) [有核栽培]	果粒肥大促進	ジベレリン 25 ppm	—	満開10～20日後	1回、 但し#1	果房浸漬
ぶどう (ヒロハンプルグを除く2倍 体欧州系品種) [有核栽培]		ジベレリン 50～100 ppm	果房散布の 場合は 70～80 ℓ	満開10～15日後		果房浸漬又は 果房散布
ぶどう (ヒロハンプルグ) [有核栽培]		ジベレリン 3～5 ppm	30～100 ℓ	展葉3～5枚時	本剤： 1回 ジベレリン： 3回以内 但し#5	花房散布
ぶどう (キングデラ、ハ ニーシードレス、 BKシードレスを 除く3倍体品種)	着粒安定 果粒肥大促進	第1回目 ジベレリン 25～50 ppm 第2回目 ジベレリン 25～50 ppm	—	満開時～満開3日後 (第1回目) 及び満開10～15日後 (第2回目)	本剤： 2回 但し#2 ジベレリン： 3回以内 但し#5	第1回目：花房浸漬 第2回目：果房浸漬
ぶどう (BKシードレス)		ジベレリン 100 ppm	—	満開3～6日後	本剤： 1回 但し#1 ジベレリン： 2回以内 但し#2	
		ぶどう (キングデラ)	第1回目 ジベレリン 50 ppm 第2回目 ジベレリン 50～100 ppm	果房散布の 場合は 50～100 ℓ	満開時～満開3日後 (第1回目) 及び満開10～15日後 (第2回目)	2回
ぶどう (ハニーシードレス)		ジベレリン 100 ppm	—	満開3～6日後	1回、 但し#1	花房又は 果房浸漬

作物名	使用目的	使用濃度	10アール当り 使用液量	使用時期	総使用回数	使用方法
ぶどう (サニールー ジュを除く巨峰 系4倍体品種) [無核栽培]	無種子化 果粒肥大促進	ジベレリン 25 ppm	—	満開3～5日後 (落花期)	本剤： 1回 但し#1 ジベレリン： 3回以内 但し#5	花房浸漬(ホルク ロルフェニューロン 10 ppm 液に加入)
		第1回目 ジベレリン 12.5～ 25 ppm 第2回目 ジベレリン 25 ppm		満開時～満開3日後 (第1回目) 及び満開10～15日後 (第2回目)	本剤： 2回 但し#2 ジベレリン： 3回以内 但し#5	第1回目：花房浸漬 第2回目：果房浸漬
	無種子化	ジベレリン 12.5～ 25 ppm		満開時～満開3日後	本剤： 1回 但し#1 ジベレリン： 3回以内 但し#5	花房浸漬(満開10 ～15日後にホルク ロルフェニューロン による果粒肥大促 進処理を行うこと)
	果房伸長促進	ジベレリン 3～5 ppm		30～100 ℓ	展葉3～5枚時	本剤： 1回 ジベレリン： 3回以内 但し#5
ぶどう (サニールージュ) [無核栽培]	無種子化 果粒肥大促進	ジベレリン 25 ppm	—	満開3～5日後 (落花期)	本剤： 1回 但し#1 ジベレリン： 3回以内 但し#5	花房浸漬(ホルク ロルフェニューロン 10 ppm 液に加入)
		第1回目 ジベレリン 12.5～ 25 ppm 第2回目 ジベレリン 25 ppm		満開時～満開3日後 (第1回目) 及び満開10～15日後 (第2回目)	本剤： 2回 但し#2 ジベレリン： 3回以内 但し#5	第1回目：花房浸漬 第2回目：果房浸漬
	無種子化	ジベレリン 12.5～ 25 ppm		満開時～満開3日後	本剤： 1回 但し#1 ジベレリン： 3回以内 但し#5	花房浸漬(満開10 ～15日後にホルク ロルフェニューロン による果粒肥大促 進処理を行うこと)
	果房伸長促進	ジベレリン 3～5 ppm		30～100 ℓ	展葉3～5枚時	本剤： 1回 ジベレリン： 3回以内 但し#5
	着粒密度低減 果粒肥大促進	第1回目 ジベレリン 25 ppm 第2回目 ジベレリン 25 ppm	—	満開予定日14～20日前 (第1回目) 及び満開10～15日後 (第2回目)	本剤： 2回 但し#2 ジベレリン： 3回以内 但し#5	第1回目：花房浸漬 (ホルクロルフェニュー ロン3ppm 液に加入) 第2回目：果房浸漬
ぶどう (ふくしずく) ぶどう (高尾)	果粒肥大促進	ジベレリン 50～ 100 ppm	—	満開時～満開7日後	1回、 但し#1	花房又は 果房浸漬

作物名	使用目的	使用濃度	10アール当り 使用液量	使用時期	総使用回数	使用方法
ぶどう (あづましずく)	果粒肥大促進	第1回目 ジベレリン 25~50 ppm 第2回目 ジベレリン 50 ppm	—	満開時(第1回目) 満開4~13日後 (第2回目)	2回以内、 但し #2	果房浸漬

●ぶどう以外

作物名	使用目的	使用濃度	10アール当り 使用液量	使用時期	総使用回数	使用方法
かんきつ (不知火、ぼんかん、かぼす、はるみ、ワシントンネーブル、日向夏、すだち、平兵衛酢、長門ユズキチ(無核)、温州みかん、きんかんを除く)	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25~50 ppm	50~250 ℓ	収穫直後~ 収穫約1ヵ月後	1回	立木全面散布 又は枝別散布
	落果防止		50~100 ℓ	開花始め~満開10日後		散布
きんかん	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25~50 ppm	50~250 ℓ	収穫直後~ 収穫約1ヵ月後	本剤: 1回 ジベレリン: 3回以内	立木全面散布 又は枝別散布
	落果防止			開花始め~満開10日後		散布
	着果安定	ジベレリン 300 ppm	30~60 ℓ	一番花開花期		花に散布
不知火	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25~50 ppm	50~250 ℓ	収穫直後~ 収穫約1ヵ月後	本剤: 1回 ジベレリン: 3回以内	立木全面散布 又は枝別散布
	落果防止		50~100 ℓ	開花始め~満開10日後		散布
	水腐れ軽減	ジベレリン 0.5~1 ppm	50~500 ℓ	着色終期 但し、収穫7日前まで		果実散布
ぼんかん	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25~50 ppm	50~250 ℓ	収穫直後~ 収穫約1ヵ月後	1回	立木全面散布 又は枝別散布
	落果防止		50~100 ℓ	開花始め~満開10日後		散布
	水腐れ軽減	ジベレリン 0.5 ppm	50~500 ℓ	着色始期~4分着色期 但し、収穫21日前まで		果実散布
長門ユズキチ (無核)	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25~50 ppm	50~250 ℓ	収穫直後~ 収穫約1ヵ月後	1回	立木全面散布 又は枝別散布
	落果防止		50~100 ℓ	開花始め~満開10日後		散布
	着果安定	ジベレリン 50 ppm	50~100 ℓ	開花期~開花終期		花又は果実散布
	果皮の緑色維持	ジベレリン 10~25 ppm	50~400 ℓ	収穫予定14~30日前		果実散布
すだち	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25~50 ppm	50~250 ℓ	収穫直後~ 収穫約1ヵ月後	1回	立木全面散布 又は枝別散布
	落果防止		50~100 ℓ	開花始め~満開10日後		散布
	果皮の緑色維持	ジベレリン 5~25 ppm	50~400 ℓ	収穫予定7~30日前		果実散布
平兵衛酢 かぼす	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25~50 ppm	50~250 ℓ	収穫直後~ 収穫約1ヵ月後	1回	立木全面散布 又は枝別散布
	落果防止		50~100 ℓ	開花始め~満開10日後		散布
	果皮の緑色維持	ジベレリン 10~25 ppm	50~400 ℓ	収穫予定14~30日前		果実散布

作物名	使用目的	使用濃度	10アール当り 使用液量	使用時期	総使用回数	使用方法
ワシントンネーブル	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ	収穫直後～ 収穫約1ヵ月後	1回	立木全面散布 又は枝別散布
	落果防止	ジベレリン 500 ppm	30～40 ℓ	満開10～20日後の幼果期		幼果に散布
日向夏	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ	収穫直後～ 収穫約1ヵ月後	1回	立木全面散布 又は枝別散布
	無種子化 落果防止	ジベレリン 300～ 500 ppm	30～40 ℓ	満開7～10日後		果実散布
温州みかん	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ	収穫直後～ 収穫約1ヵ月後	本剤: 1回 ジベレリン: 3回以内	立木全面散布 又は枝別散布
		ジベレリン 10 ppm				立木全面散布 又は枝別散布 (プロヒドロジャスモン 1000～2000倍液に加用)
	落果防止	ジベレリン 10 ppm	50～100 ℓ	開花始め～満開10日後		散布 (プロヒドロジャスモン 1000～2000倍液に加用)
		ジベレリン 25～50 ppm				散布
浮皮軽減	ジベレリン 1～5 ppm	100～400 ℓ	収穫予定日の3ヵ月前 但し、収穫45日前まで	果実散布 (プロヒドロジャスモン 1000～2000倍液に加用)		
かんきつ (苗木、ただし、温州みかんを除く)	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ	12～3月	1回	立木全面散布 又は枝別散布
温州みかん (苗木)				ジベレリン 10 ppm		
びわ (3倍体)	着果安定 果実肥大促進	第1回目 ジベレリン 200 ppm	—	満開予定日 約7日前～満開時 (第1回目) 及び第1回目 処理後35～60日 (第2回目)	2回	ホルクロルフエニユ ロン20 ppm液に加用 第1回目花房浸漬 第2回目果房浸漬
		第2回目 ジベレリン 200 ppm				
すもも (貴陽)	着果安定	ジベレリン 100～ 200 ppm	20～50 ℓ	満開20～30日後 (第1回目) 満開50～60日後 (第2回目)	1回	果実散布
アセロラ	着粒安定	ジベレリン 25 ppm	100～400 ℓ	開花期	本剤:1花 当り1回 ジベレリン:1花 そう当り 3回以内	花に散布
メロン	着果促進	ジベレリン 200 ppm	1花当り 2～5 ml	開花前日～翌日	本剤:1花 当り1回 ジベレリン:#10	散布(4-CPA剤 50倍液に加用)
野菜類	発芽促進	ジベレリン 50～200 ppm	—	は種前	1回	種子浸漬

作物名	使用目的	使用濃度	10アール当り 使用液量	使用時期	総使用回数	使用方法
み つ ば (軟化栽培を除く)	生育促進	ジベレリン 10 ppm	50~100 ℓ	本葉2~3枚時 (第1回目)と その2週間後 (第2回目) 但し、収穫14日前まで	本 剤:2回 ジベレリン: 3回以内 (#6)	葉面散布
み つ ば (軟化栽培)		ジベレリン 20~50 ppm		根株伏込時	本 剤:1回 ジベレリン: 2回以内 (#7)	根株上面に散布
ト マ ト	空どう果防止	ジベレリン 10 ppm	1花房当り 5 ml	開花時	本 剤:1花房 当り1回 ジベレリン: #8	花房散布 (トマト落果防 止剤と併用)
な す	着果数増加	ジベレリン 10~50 ppm	100~150 ℓ		本 剤:1回 ジベレリン: 2回以内 (#9)	葉面散布
い ち ご (促成栽培)	着果数増加 熟期促進	ジベレリン 10 ppm	1株当り 5 ml	休眠に入る直前 (冬場の低温期)	本 剤:1株 当り6回以内 ジベレリン: #3	莖葉全面散布
い ち ご	果柄の伸長 促進			頂花の出蕾直後 ~開花直前	本 剤:1花房 当り1回 ジベレリン: #3	株の中心部に 散布
い ち ご (親株床)	ランナー発 生促進	ジベレリン 50 ppm	1株当り 10 ml	採苗時ランナー 発生直前~発生初期	1株当り 1回	莖葉散布
セルリー	生育促進 肥大促進	ジベレリン 50~100 ppm	20~200 ℓ	収穫予定 7~20日前	本 剤:1回 ジベレリン: 2回以内 (#9)	葉面散布
う づ だ (春うど)	休眠打破によ る生育促進	ジベレリン 50 ppm	1株当り 20~25 ml	伏込時	1回	根株散布
		ジベレリン 50~100 ppm	—			根株浸漬
ふ き	生育促進	ジベレリン 25 ppm	50~300 ℓ	葉数3~4枚時 (草丈10~30cm頃)		全面散布
畑 わ さ び	花茎の抽出 時期促進及び 発生量増加	第1回目 ジベレリン 100 ppm 第2回目 ジベレリン 100 ppm	1株当り 2 ml	花芽分化後の10月下旬 (第1回目) 及び第1回目処理後 約10日後の11月上旬 (第2回目) 但し、収穫60日前まで	本 剤:2回 ジベレリン: 3回以内 (#6)	株の中心部に 散布
たらのき (促成栽培)	萌芽促進	ジベレリン 50 ppm	100~200 ml / m ²	伏込時	1回	駒木散布
さやいんげん 〔矮性(促成又は 半促成栽培)〕	節間伸長促進	ジベレリン 5 ppm	1株当り 2 ml	本葉0.5~1.5枚 展開時	本 剤: 2回以内 ジベレリン: 3回以内 (#6)	莖頂部散布
し そ (花穂)	穂の伸長促進 花径の伸長促進		50 ℓ	出穂期 但し、収穫5日前まで		莖葉散布
ばれいしょ	休眠打破によ る萌芽促進及 び小粒いもの 増収	ジベレリン 5~10 ppm	—	植付前	1回	30秒間 種いも浸漬
			250~300 ml / 種いも10 kg			種いも散布
種いも用 ばれいしょ	休眠打破によ る萌芽促進及 び全粒種いもの 増収	ジベレリン 5~10 ppm	—	植付前	1回	30秒間 種いも浸漬
			250~300 ml / 種いも10 kg			種いも散布

作物名	使用目的	使用濃度	10アール当り 使用液量	使用時期	総使用回数	使用方法
シクラメン	開花促進	ジベレリン 1～5 ppm	1株当り 2～5 ml	9月中・下旬	1回	花蕾を含む芽の 中心部に散布
プリムラ (マラコイデス)		ジベレリン 10～20 ppm		11月上旬頃 の花蕾出現直後		株の中心部に 散布
みやこわすれ	開花促進 草丈伸長促進	ジベレリン 50～100 ppm	1株当り 10～15 ml	1月中旬の 保温開始時から 7～10日間隔	本剤:3回 ジベレリン: 3回以内	葉面散布
きく		ジベレリン 25～100 ppm	50～100 l	生育期	2回以内	茎葉散布
しらん		ジベレリン 50 ppm	—	植付時	1回	30分間株浸漬
りんどう	発芽促進	ジベレリン 50～200 ppm	—	は種前	本剤:1回 ジベレリン: 2回以内 (#9)	種子浸漬
	生育促進	ジベレリン 100 ppm	50～150 l	定植直前または 定植1～5週間後		茎葉散布
1株当り 5～10 ml			収穫後	切株散布		
さくらら (切り枝促成栽培)	休眠打破による 生育促進	ジベレリン 25～50 ppm	50～200 l	休眠期	1回	切り枝全面散布 切り枝浸漬
カラ	生育促進	ジベレリン 50 ppm	—	植付時	本剤:1回 ジベレリン: 2回以内	球根浸漬
			50～150 l	花茎伸長期		
スパティフィラム	開花促進	ジベレリン 250～ 500 ppm	30～40 l	出荷予定期の 2～3カ月前	1回	茎葉散布
トルコギキョウ	生育促進	ジベレリン 50～100 ppm		生育期間中に ロゼット化した時		
		ソリダゴ	ジベレリン 25 ppm	1株当り 1 ml		
アザレア	開花促進	ジベレリン 250～ 500 ppm	30～40 l	開花予定日 約1カ月前		
アイリス	生育促進	ジベレリン 50～100 ppm	—	植付時		
花き類 (りんどうを除く)	発芽促進	ジベレリン 50～200 ppm	—	は種前	種子浸漬	
さつき (施設栽培苗)	茎の伸長促進 花芽分化の抑制	ジベレリン 100～ 200 ppm	50～100 l	茎の伸長初期 ～伸長終期 (開花盛期以降) 1～2週間間隔	本剤:3回 ジベレリン: 3回以内	頂芽に十分散布

- #1: 降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内
 #2: 降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内
 #3: 1株当り10回以内
 #4: 降雨等により再処理を行う場合は合計3回以内
 #5: 降雨等により再処理を行う場合は合計5回以内
 #6: 種子への処理は1回以内、は種後は2回以内
 #7: 種子への処理は1回以内、根株伏込時は1回以内
 #8: 種子への処理は1回、1花房当り1回
 #9: 種子への処理は1回以内、は種後は1回以内
 #10: 種子への処理は1回、1花当り1回

使用上の注意事項

[1] 薬液の調製法及び取扱い上の注意

- 本剤は次表に従って所定量の水に希釈すれば希望濃度の水溶液を作ることが出来る。

使用濃度 (ジベレリン、ppm)	1	5	10	25	50	100
本剤1錠当りの水量	25ℓ	5ℓ	2.5ℓ	1ℓ	500ml	250ml
本剤2錠当りの水量	50ℓ	10ℓ	5ℓ	2ℓ	1ℓ	500ml
本剤3錠当りの水量	75ℓ	15ℓ	7.5ℓ	3ℓ	1.5ℓ	750ml
本剤4錠当りの水量	100ℓ	20ℓ	10ℓ	4ℓ	2ℓ	1ℓ
本剤8錠当りの水量	200ℓ	40ℓ	20ℓ	8ℓ	4ℓ	2ℓ

- 薬液は使用の都度調製し、なるべく調製当日に使用する。又調製液はなるべく日陰におく。
- ボルドー液等アルカリ性の薬剤との混用はさける。
- 本剤の使用に当っては使用濃度、使用量、使用時期、使用方法を誤らないように注意し、特に初めて使用する場合は病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。
- 適用作物群に属する作物又はその新品種に本剤をはじめて使用する場合は、使用者の責任において事前に薬効薬害の有無を十分確認してから使用する。なお、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

[2] 使用上の注意

●ぶどう

- ぶどうに関する作物名中の品種による区分は、ジベレリンに対するぶどうの反応性の違いを考慮した区分なので、ぶどうの品種がどの区分(品種群)に該当するか、病害虫防除所等関係機関に確認してから使用する。
- 下記の「ぶどうの品種による区分」に記載のない品種に対して本剤を初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及び薬害を確認した上で使用する。
- ぶどうの品種による区分
 - ・2倍体米国系品種
「マスカット・ベリーA」「アーリースチューベン(バッファロー)」「旅路(紅塩谷)」
 - ・2倍体欧州系品種
「ロザリオ ビアンコ」「ロザキ」「瀬戸ジャイアンツ」「マリオ」「アリサ」「イタリア」「紫苑」「ルーベルマスカット」「ロザリオ ロッソ」「シャインマスカット」
 - ・3倍体品種
「サマーブラック」「美嶺」「ナガノパープル」「キングデラ」「ハニーシードレス」「BKシードレス」
 - ・巨峰系4倍体品種
「巨峰」「ピオーネ」「安芸クィーン」「翠峰」「サニールージュ」「藤稔」「高妻」「白峰」「ゴルビー」「多摩ゆたか」「紫玉」「黒王」「紅義」「シナノスマイル」「ハイベリー」「オーロラブラック」
(「あづましずく」「ふくしずく」等の巨峰系4倍体シードレス品種は該当しない)
- 降雨や、異常乾燥(フェーン現象等による異常乾燥)の心配の無い日を選んで処理する。
- 処理後の天候急変(降雨、異常乾燥)で本剤の吸収が不十分になるおそれがある場合には、ジベレリンを含む農薬の総使用回数の範囲内で再処理を行うことができる。なお、再処理に当たっては、病害虫防除所等関係機関の指導を受ける。
- 樹勢の弱い樹や登熟の悪い枝等に対しては、効果が不十分なので使用をさける。樹勢がやや強めの方が安定した効果が得られるが、極端に樹勢が強い場合はかえって効果が出

にくいので樹勢の管理には十分気をつける。栽培管理については、病虫害防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

- 本剤の使用により、着粒が安定するとともに果粒の肥大が促進されるので、着粒過多（過密着）による裂果発生のおそれがある。また、果梗が硬化し脱粒しやすくなるので、裂果や脱粒を未然に防ぐため、開花前の整房や着粒後の摘粒等の栽培管理を適切に行う。栽培管理については、病虫害防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。
- 使用時期或使用濃度を誤ると、花振り、着粒過多（過密着）、有核果混入等のおそれがあるので、使用時期、使用濃度は厳守する。
- 無種子化を目的とした着粒前の処理の際は、特に丁寧に処理することを心がけ、薬液が花蕾全体に十分いきわたるよう注意する。
- 果粒肥大促進を目的とした着粒後の処理の際は、薬液が付きすぎないように、処理後ぶどうの枝やぶどう棚の針金を軽く振って余分な薬液を落とす。
- ぶどう（2倍体米国系品種）に無種子化・果粒肥大促進の目的で使用する場合、第2回目処理を浸漬で行うときは100 ppmで処理する。また、第2回目処理を散布で行うときは75～100 ppm（80～100 ℓ / 10 a）で処理する。散布で行う場合、散布処理は浸漬処理に比べ果粒肥大がやや劣ることがあるので、健全な樹に対して行い、薬液が果房に十分かかるように注意する。
- 本剤とストレプトマイシン剤を併用することで無核果率の向上を図ることができる。使用に当たっては、病虫害防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。また、ストレプトマイシン剤の使用上の注意事項を厳守する。
- ぶどう（デラウェア）〔無核栽培〕で使用する場合、満開予定日約14日前よりも早く処理するときは、花振りすることがあるのでホルクロルフエニユロン剤を加用する。また、ホルクロルフエニユロン剤を加用して処理する際は、ホルクロルフエニユロン剤の使用上の注意事項を厳守する。
- ぶどうの果房伸長促進の目的で使用する場合は、必ず花房だけを目がけて花房全体が十分濡れる程度に部分散布する。この時期に誤って大量の薬液が枝や葉にかかると、その翌年に発芽不良などの新梢の生育障害が起こるおそれがあるので、動力噴霧機やスピードスプレーヤなどによる全面散布は行わない。
- ぶどう（あづましずく）に使用する場合、満開4～13日後の1回処理で十分な効果が得られるが、栽培方法や樹勢等によっては満開時と満開4～13日後の2回処理する必要があるので、使用に当たっては病虫害防除所等関係機関の指導を受ける。
- ぶどう（巨峰、ルビーロマン、ハニービーナス）〔有核栽培〕に果粒肥大促進の目的で使用する場合は、早めの処理により無核化率が増加する傾向があるので、有核粒の結実を確認してから処理する。

●ぶどう以外

- かんきつ

（落果防止）

- ・本剤処理により生理落果が軽減され着果が安定するが、品種等により本剤に対する感受性が異なるので、初めての品種等に使用する場合は最寄りの指導機関の指導を仰ぐか自ら事前に薬効薬害を確認した上で使用する。
- ・果面の粗滑や果皮の厚さ等果実品質への影響が懸念される場合があるので、使用時期、濃度は守る。

（花芽抑制による樹勢の維持）

- ・衰弱した樹勢のものに使用しても期待した効果が得られない場合があるので、衰弱した樹には使用しない。
- ・低温が続いた年（極端な低温の年）または花芽の減少が予測される裏年の場合は、遅い時期の低濃度処理を心がける。
- ・散布の際は薬液が葉先からしずくとなり落下する程度に散布する。

○温州みかん

〈浮皮軽減〉

- ・本剤処理により着色が遅延することがあるため、貯蔵期間によって使用濃度を調整する。

使用濃度の目安

- ・貯蔵用または樹上完熟の温州みかんでは、概ね3.3～5 ppm。
- ・貯蔵しないあるいは貯蔵期間が短い温州みかんでは、概ね1～3.3 ppm。
- ・本剤処理により葉斑が残ることがあるため、使用に当たっては病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

○ワシントンネーブルの落果防止の目的で使用する場合は次の点に注意する。

- ・異常に結果歩合の低いものは処理しても効果の上がらないことがある。
- ・通常幼果1果当り小型噴霧器で0.1～0.2 mL程度を噴霧する。

○長門ユズキチ（無核）

- ・長門ユズキチの落果防止および着果安定の目的で使用する場合は、薬液が花または幼果から滴り落ちる程度に散布する。

○日向夏

- ・日向夏の無種子化および落果防止の目的で使用する場合は、薬液が花または幼果から滴り落ちる程度に散布する。

○びわ（3倍体）

- ・本剤処理しないとすべて落果するので必ず処理する。
- ・樹勢が弱いと果実肥大等の効果が出にくい場合があるので、樹勢は強めに維持する。2回目処理時に1果そうに数果残しておき、果形の良否が判断できる時期に品質の良い果実を残して摘果し、適正着果量をこころがける。
- ・第1回目の使用時期が早すぎると果梗部のネックが発生しやすく、第2回目の使用時期が遅すぎたり、使用濃度が高い場合は果面の緑斑が残りやすい傾向があるので、使用時期、使用濃度を守る。

○すもも（貴陽）

- ・授粉を行ってから、散布する。
- ・薬液が付きすぎないように、処理後、枝や棚の針金を軽く振って余分な薬液を落とす。
- ・第1回目の処理が早すぎると棘状の枝の発生が見られ、遅すぎると着果安定効果が劣る傾向があるので、所定の使用時期に使用する。
- ・本剤の散布により結実が過多となった場合は、果実が小さくなる傾向があるので、予備摘果と仕上げ摘果を行い着果量を調節する。

○みつば（軟化栽培を除く）

- ・葉の表裏に十分散布する。高温長日条件下の散布は抽苔しやすくなるので、秋作を中心に処理した方がよい。

○みつば（軟化栽培）

- ・灌水は処理の当日はさけ、翌日に行う。散布により発生茎数が多くなるので根株の伏込みは心持ち加減する。

○トマト

- ・落果防止剤を使用した後の本剤の散布は効果が若干劣るので、本剤を先に散布するか、又は混用して使用する。

○いちご

〈着果数増加・熟期促進〉

- ・処理したいちごの果柄がのび、花、果実が葉の上に出た頃寒波がくると特に寒害を受けやすいので防寒に留意する。
- ・本剤の散布適期は休眠に突入して矮化が始まる直前であり、休眠に入ってからでは効果が期待出来ないなので、時期を失わないよう、いちごの生育状況に応じて散布時期を

決める。

又、第1回目処理後、生育状況をみながら必要に応じて追加処理をする。

・過剰散布は根の発育抑制やくず果を増加させるので、使用濃度、散布液量を厳守する。
(果柄の伸長促進)

・処理したいちごの果柄が伸び、花、果実が葉の上に出た頃寒波が来ると特に寒害を受け易いので防寒に留意する。

○セルリー

・定植後約1ヶ月以内に散布すると「す」が入りやすくなるので使用をさける。

なお、スポット散布で使用する場合は1株当たりの使用液量が5~10 mlが適量である。

○う ど (春うど)

・芽及び根株が十分滴る程度に散布又は瞬間浸漬する。灌水は処理の当日はさけ、翌日に行う。伏込み後の目土の上からの散布は根株に吸収され難いのでさける。

○ふ き

・収穫間近に散布すると効果が減少することがあるので、使用時期を誤らない。

○畑わさび

・花芽分化前に処理しても効果が出にくいので、花芽分化開始を確認してから処理する。
・全面散布は効果が劣るので株の中心部に散布し、効果を高めるため必ず2回処理する。
気温が5℃以下では効果が劣るので11月上旬からビニール等で被覆し、保温管理する。また、15℃以上になると花芽分化が抑制されるので、15℃以上にならないよう温度管理には十分注意する。

○たらのき

・散布は散布むらがないよう噴口の小さな散布器を用いて入念に行う。
・薬液が芽に均一にかかるよう、駒木の高さと芽の向きを揃えておく。

○ばれいしょ

・種いも切断後の処理は薬害を生じるおそれがあるのでさけ、必ず種いもを切断せずに処理する。
・浸漬時間が長くなったり、高濃度液に浸漬すると薬害を生じるおそれがあるので所定の浸漬時間及び使用濃度を厳守する。
・薬剤処理した種いもは長時間ぬれたままにしておくで発芽遅延等の薬害を生じるので、風通しのよい場所ですみやかに乾燥させる。
・種いもを切断する場合は処理した薬液が十分乾いてから行う。
・品種により本剤に対する感受性が異なるので、本剤を初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及び薬害を確認した上で使用する。

○種いも用ばれいしょ

・本剤は種いも生産用として原採種圃に植え付ける種いもに用いるものである。
・種いも切断後の処理は薬害を生じるおそれがあるので避け、必ず種いもを切断せずに処理する。
・浸漬時間が長くなったり、高濃度液に浸漬すると薬害を生じるおそれがあるので所定の浸漬時間及び使用濃度を厳守する。
・薬剤処理した種いもは長時間ぬれたままにしておくで発芽遅延等の薬害を生じるので、風通しのよい場所ですみやかに乾燥させる。
・種いもを切断する場合は処理した薬液が十分乾いてから行う。
・薬剤処理した種いも及びその収穫物は食料又は飼料には使用しない。
・品種により本剤に対する感受性が異なるので、本剤を初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及び薬害を確認した上で使用する。

○花 き

- ・処理濃度、量、回数は必要最小限にとどめ、徒長や軟弱化を防ぐため栽培管理に十分注意する。
- ・処理の際には花蕾のある中心部めがけて噴霧する。

〈さつき〉

- ・未開花苗に使用する場合は、茎の伸長状況を見ながら対象品種の成木の開花時期を参考にして、使用時期を決める。

〈りんどう〉

- ・処理は葉が十分濡れる程度に散布する。
- ・使用時期の定植直前は苗姿3～4対葉期を目安にする。
- ・切株散布する場合は、翌年の萌芽に影響を与えないよう散布後は生育期間を十分に確保する。

〈さくら（切り枝促成栽培）〉

- ・休眠が深い時期の処理は効果が出にくいので、自発休眠の浅い時期に処理する。

〈ソリダゴ〉

- ・高温期の処理では効果を示さないので、低温期（11～3月頃）に処理する。
- ・処理により草丈および切り花重がやや低下することがある。



安全使用上の注意



- 本剤は眼に対して強い刺激性があるので、薬液調製時には保護眼鏡を着用して薬剤が眼に入らないよう注意する。
眼に入った場合には直ちに十分に水洗し、眼科医の手当を受ける。
- 使用の際は農薬用マスクなどを着用する。作業後はうがいをする。
- 浸漬処理に使用する際は不浸透性手袋などを着用する。
- 直射日光をさけ、なるべく低温で、乾燥した場所に密栓して保管する。